輪島の海女 船で行商

戦前の論文見つかる

小松出身・沖谷さん執筆

輪島の海女が「海士船」で能登各地へ行商した「灘回り」など、戦前の海女の暮らしをまとめた1935（昭和10）年の論文が、元小松市教育長の矢原珠美子さん（79）＝同市日の出町＝の自宅で見つかった。加能民俗の会会員の西山郷史さん（69）＝珠洲市飯田町＝が確認した。海士船の写真も残されており、海女の暮らしを知る貴重な史料とみられる。

沖谷忠幸さん

論文「舳倉島の海女の灘回り」は、旧飯田高等女学校（飯田高の前身）の教員だった、矢原さんの父沖谷忠幸さん＝小松出身＝が著し、論文集「社会経済史学」に海士船の写真とともに掲載された。

沖谷さんは國學院大学生時代に民俗学の大家折口信夫教授や柳田国男氏の教えを受けている。論文を発表した4年後に32歳で病没し、論文は矢原さんの自宅に残されていた。

内浦側へ33ルート

論文には、舳倉島での漁を終えた後の行商ルートや魚のぬか漬けなどの価値、コメとの物々交換の様子、子弟の教育、冬の過ごし方、正月の風習などが書かれている。

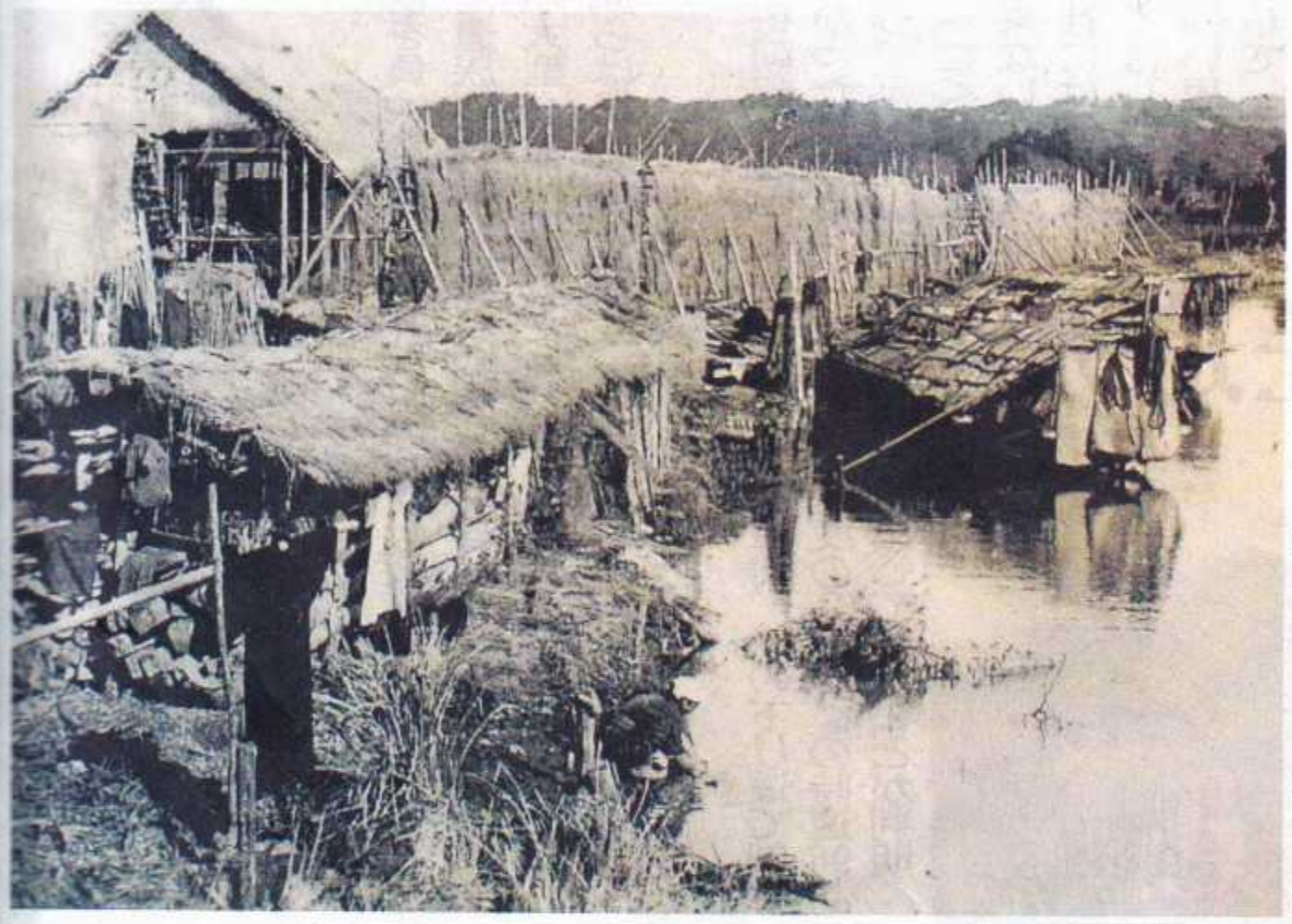
関係者「石川の民俗学の先駆け」

論文によると、海女の行商は奥能登の内浦側から七尾、能登島への33ルートあった。海女の生活拠点でもあった「海士船」などで回り、海産物を売った。当時、船での行商は車を使った行商に押され、消滅寸前だったという。

現在の珠洲市飯田町周辺では、ぬか漬けの魚が酒たる12～26個分、イカが酒たる半分から1個分、ほかに海藻やサザエなどを売ったと記されている。ぬか漬けの魚は山村部で好まれ、イカやサザエは生活程度の高い町村で人気があったともつづられている。

販売は海女が担当し、家族の男性は留守番として子守やほかの仕事をしていた。飯田の定期市に出店することがあり、得意先が少ない海女にとっては「この市は実に有り難い存在」だった。

輪島の海女文化は、石川県と輪島市が、国重要無形民俗文化財への指定や、国連教育科学文化機関（ユネスコ）の無形文化遺産への登録を目指す中で注目を集めている。西山さんは「沖谷さんの論文は石川の民俗学の先駆けといえる。経済史学の観点でも戦前の海女、能登の交易をまとめた貴重な文献だ」と指摘した。



沖谷さんが撮影した、現在の珠洲市若山川河口付近に停泊する当時の「海士船」（矢原さん提供）